シェル・空間構造の設計法の確立と
構造に基づく建築デザインに関する貢献

名誉会員　川　口　　衞　殿

川口衞君は、1960 年代から長年にわたり国内外で多岐にわたる構造設計に携わってきた。なかでも、その初期において当時の坪井善勝東京大学教授のプロジェクトに参画協力した国立代々木競技場は、1964 年開催の東京オリンピックの屋内競技主会場として建設され、その斬新な構造設計がその後の日本の空間構造の構造設計の潮流に大きな影響を及ぼした。その後も大阪万国博覧会お祭り広場大屋根、バルセロナオリンピック屋内競技場、シンガポール・インドア・スタジアム、サンドーム福井、なみはやドーム、イナコスの橋などの構造設計、さらにはパンタドーム構法の提案と実施など、多くの作品や構法を通して同君が世に示した業績は、構造設計という仕事の持つ醍醐味とその社会的意義を余すところなく語るものであり、同君はまさに日本を代表する世界の構造家である。これらの業績により、日本建築学会賞、日本建築学会作品選奨、土木学会賞、国際構造工学（IABSE）国際賞、ブルネル賞、国際シェル・空間構造学会（IASS）の Tsuboi Award およびトロハメダルなど国内外の多数の賞を受賞している。

同君は、スポーツ施設やホールなどの大スパン建築の構造設計に関する唯一の国際組織である国際シェル･空間構造学会の理事を長年務めるとともに、2000 年から 2006 年にかけて同学会の会長を務め、当該分野における国際的な貢献も極めて大きい。同君の構造設計に関する業績と当該分野での種々の貢献については、1997 年にシュツットガルト大学（ドイツ）名誉工学博士、1998 年にスロバキア工科大学（スロバキア）名誉工学博士を授与されるなど、国の内外を問わず、建築界、土木界において極めて高く評価されている。

同君は，日本建築学会においても活発に活動し、監事、学術理事、シェル・空間構造運営委員会主査などの要職を務めている。また，上記のような幾多の構造設計、新しい構造システムの開発、国際学会での諸活動などにより得た経験に基づいて、学生や後進の教育に関して大きな貢献を果たした。さらに、国内外の学会、研究集会などにおいて行われた同君の招待講演は、構造設計を志し、その方法を学ぼうとする後進にとって、豊富な示唆と限りない魅力を伝えるものであり、同君の設計活動そのものとともに、建築構造の持つおもしろさや深さについて、同君が若い人々を大きく鼓舞したことは特筆すべき業績である。1990 年に彰国社より刊行された『建築構造のしくみ』は、構造教育という観点からの代表的な著作であり、初版以来 20 年間に重版を重ねて 2 万部に及ぶ専門書としては他に類を見ない破格の発行実績を持ち、これにより触発され構造設計に目覚めた若人は数知れない。

以上、同君は国内外の建築構造学、特に空間構造の構造設計に多大な貢献を果した。その功績は、本会大賞を授与するに値すると評価される。

よって、ここに日本建築学会大賞を贈るものである。